

## 2023年棚田学会大会シンポジウム 結果報告書

今年度の棚田学会大会シンポジウムは「棚田地域への移住・定住の試みー地域おこし協力隊の活躍とアフターコロナにおける棚田の未来ー」をテーマとし、下記の日時に対面とオンライン併用方式により開催した。

開催日時：2023年8月26日 13:30～17:00

開催場所・方法：東京大学農学部中島董一郎記念ホールを会場とした対面とZoomによるオンライン方式

参加者数：申込者数：会場参加70名、オンライン参加：69名（合計139名）

開催趣旨は以下の通りである。

「棚田の減少が著しい。中山間地域等直接支払制度、棚田地域振興法などの施策がさまざまに講じられているが、それを上回る速度で棚田が失われている。過疎高齢化による担い手不足は深刻であり、そのためにも外からの支援が求められるが、棚田は日常的な管理を伴うため、定住して守ることが必要である。コロナ禍の後押しもあって、地方移住の希望者は増えているものの、棚田保全に関わろうとする人はそれほど多くはない。

それでは現在、どのような人材が移住して棚田を守っているのだろうか。地域は、自治体はどんな支援をすべきなのだろうか。移住・定住問題に取り組む研究者を基調講演に迎え、全国各地の移住者や地域おこし協力隊の活躍事例（失敗や反省を含む）などをもとに、棚田地域の未来につながる議論としたい。」

プログラムは、1. 基調講演、2. 事例報告、3. 総合討論の3部構成とした。

当日は、開会挨拶（山路永司会長）、開催趣旨の再確認（菊地稚奈研究委員）、基調講演、3題の事例報告、総合討論の流れで進め、総括および閉会挨拶で締めくくった。

基調講演および事例報告の概要は以下のとおりである。

基調講演：「“田園回帰”時代の地域づくりー棚田地域が切り拓く可能性ー」

図司直也（法政大学現代福祉学部 教授）

農山村の人口動態と居住者の質の変化、農山村再生とコミュニティ再生のプロセスについてその方向性を示唆。特に居住者の多業化と地域の価値に気づくことが重要。

事例報告1：農村文化の担い手としての移住者

嵩 和雄（國學院大學観光まちづくり学部観光まちづくり学科 准教授）

移住希望者の増加は事実だが移住地探しの軸選びを間違えないことが重要。各自がイメージするライフスタイルと地元のマッチングについて新潟県の事例をまじえて報告。

事例報告2：棚田保全の世代交代

多田朋孔（特定非営利活動法人 地域おこし 代表理事）

新潟県十日町市池谷集落を事例とし、棚田保全の現場側からの視点で報告。多田氏自身も家族とともに移住し地域に根付いた経験から、移住者受け入れのプロセスを報告。

事例報告3：うきは市における棚田保全および移住促進の取り組み

佐々木理沙（うきは市役所うきはブランド推進課地域振興係 係長）

つづら棚田の保全を事例とし棚田オーナー制度ほか棚田保全支援策について報告。移住者は増加しているが、イコール棚田保全に繋がるわけでもないことも事実で今後の方策を模索中。

総合討論（司会：菊地稚奈研究委員）では、会場参加者や聴講参加者からも多くの質問やコメントが寄せられるとともに、基調講演者や3人の報告者とのやり取りが活発に行われた。

最後に上野裕治研究委員長が以下のように総括した。

- ・少子高齢化、後継者不足という課題は棚田地域だけの問題ではないことは承知しているが、それでも今回このテーマでシンポジウムを実施したのは、棚田の持つ多面的機能を維持する必要があると共に、棚田地域に生活するというライフスタイルへの欲求が増加している事実がある。
- ・棚田地域の多面的価値をさらにアピールし、それを維持するための移住・定住を進めていくために、棚田学会がいまどのような研究や活動を行うべきかということについて、多くの示唆をいただいた。
- ・移住・定住にも様々なケースがあり、また失敗もあることを認識し、棚田地域の存続に対してさらに希望を持って臨みたいと考える。

以上のように、4年ぶりの対面でのシンポジウムではあったが、4年前とは異なりWEB参加とのハイブリッド開催となり、この方式は今後とも継続するものと考えられる。

今回のシンポジウムでは実践的な発表とともに活発な議論も行われ、今後の棚田地域の発展に寄与する大変有意義なシンポジウムであったと考える。



総合討論の状況（左より菊地、関司、嵩、多田、佐々木、WEB配信画面より）



会場の様子と上野総括

（以上）

棚田学会研究委員長 上野裕治